αMプロジェクト2023–2024

開発の再開発

Redevelopment of Development

vol. 8 Multiple Spirits | いつでもルナティック、あるいは狂気の家族廃絶

vol. 8 Multiple Spiritsi: Anytime Lunatic – Family Abolition

ゲストキュレーター：石川卓磨（美術家・美術批評）
Guest Curator: Takuma Ishikawa (Artist, Art Critic)

2024年11月30日（土）–2025年2月8日（土）
冬期休廊：12月22日（日）–2025年1月6日（月）
12:30–19:00　日月祝休　入場無料
協力：平和紙業株式会社、株式会社竹尾

アーティストトーク　11月30日（土）18:30–
Multiple Spirits×石川卓磨

会場：gallery αM

〒162-0843 東京都新宿区市谷田町1-4 武蔵野美術大学市ヶ谷キャンパス 2階
tel：03-5829-9109　fax：03-5829-9166
https://gallery-alpham.com
※2023年度より馬喰町から移転いたしました。電話番号、FAX、メールアドレスに変更はございません。

遠藤麻衣《いつでもルナティック、あるいは狂気の家族廃絶》
2024

開発を破壊する開発

Multiple Spirits（マルスピ）は、アーティスト・俳優の遠藤麻衣とキュレーター・批評家の丸山美佳によるコレクティブである。日英バイリンガルのクィア・フェミニストの思考と実践を目指すZINEの発行を中心に、展覧会・コラボレーション制作・翻訳など多様なプロジェクトを展開してきた。マルスピにとって展覧会とは、単に作品を展示することを目的とした場ではない。それは ZINE 制作の延長線上にあり、クィア・カルチャーを中心とした彼女たちの実践の場として捉えた方が適切だろう。ZINE や雑誌では、複数の筆者による記事が寄稿されるように、今回の展覧会では、マルスピのほかに、国内外からアーティストたちが参加する。

ここで出版＝展覧会という考え方は、家族の写真アルバムとのアナロジーとして捉えることができるかもしれない。なぜなら、写真アルバムは、バラバラに生活している家族を一時的に一つの場に集める・保存する媒介だからだ。

もちろん、この推論は的外れである。なぜならマルスピは、「家族廃絶」とアナキズム（無政府主義）とフェミニズムを結びつけた「アナーカ・フェミニズム」を標榜しているからだ。「家族廃絶主義」ではなく「家族廃絶」と示すことには、二人の実践へのより強い意志が込められている。

こう書くと戸惑う人も少なからずいるだろう。家族という共同体の連帯は、愛、ケア、アイデンティティの基礎として、社会の中で最も重要な生活単位と考えられているからだ。しかしその一方で、家族は、ドメスティックな暴力、家父長制、無償労働、性的役割、排他的な共同体の源泉になっている。「家族廃絶」という言葉に拒否感を持つ人でも、家族が抱える抑圧的な構造の存在を否定することはできない。さらに、家族廃絶というラディカルな概念を検討するためには、ドメスティックな家族の問題に留まらず、封建的な社会システム、資本主義、近代化、天皇制、植民地主義、人間中心主義に対する批判的検討が不可欠である。したがって、マルスピの批判の射程は広範囲に及ぶ。

では、この大胆で急進的な姿勢と実践は、何か希望や可能性を生み出すのだろうか。それを性急に求めることは、アクティビズムの本質を見誤ってしまう。まず「否」と強く主張すること、あるいは未来のディストピアを歌うこと——今日のアクティビズムの実践は、そこから始まる。そして、そこで結ばれる新しい共同体／展覧会のかたちが、私たちに未来を予見させる。彼女たちはその新しい共同体のかたちをあえて「雑技団」と名付けた。これが一つの抵抗であり、創造的実践となる。マルスピはラディカルに破壊的な「開発」の再開発を試みる。

石川卓磨

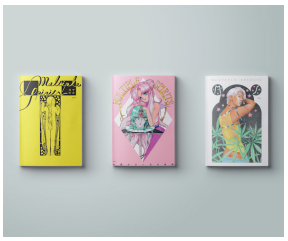
いつでもルナティック、あるいは狂気の家族廃絶

Multiple Spirits（マルスピ）は言説や知識の伝播、流通、転用に興味を持っており、過去に生まれた視覚表現や言説が現在の現代美術、大衆文化、アクティビズム、クィア・カルチャーにどのように影響を与えてきたのかを探求してきました。本展はとくに、家族廃絶やアナーカ・フェミニズムの言説、視覚表現、実践について、雑誌メディアに着目した調査から生まれてきました。

「家族廃絶」とは、「家族」という概念と表裏一体である近代の資本主義や新自由義、異性愛中心主義、植民地主義・帝国主義を受肉した社会や構造への批判とその廃絶を示します。抑圧や制御を前提としたヒエラルキーからの解放を目指しつつ矛盾や葛藤も含むこの実践、運動、言説、そして表現の探求において、私たちは、少女ギャグマンガ『ルナティック雑技団』の美学に着想を得ています。このマンガは、少女マンガのコードの過剰さと 1960–70 年代のアングラ文化的表象に対する茶化し、そして「家族」ではなく「雑技団」の枠組みを通して、ジェンダー、階級、病理化されてきた女性のヒステリー、「家族」が抱える複数の厄介さを扱っています。そのような規範の揺るがしや逸脱という視点から、日常生活と地続きにある言葉や表現、現代の芸術とアクティビズムを緩やかに横断する実践を紹介するとともに、女性運動に関わる雑誌や資料を、植民地主義・帝国主義と不可分な近代化社会における解放運動として再文脈化することを目指します。

Multiple Spirits

●Multiple Spirits（まるちぷる・すぴりっつ）
2018年にアーティスト・俳優の遠藤麻衣とキュレーター・批評家の丸山美佳によって、日英バイリンガルのクィア・フェミニストの実践を目指すZineとして結成・創刊。ファンジンやウェブ記事を発行しながら、研究調査、展覧会、コラボレーション制作、トークイベント、翻訳など多岐に渡るプロジェクトを展開。セクシュアリティー、ジェンダー、人種、階級といった重なりあう差別解体を視野にいれ、様々な角度から芸術活動の研究と紹介をする。また、東アジアにおける芸術運動やクィアフェミニズム運動と雑誌メディアといった大衆メディアやアーカイブの関係性の調査を行い、2020年には、歴史的研究資料や雑誌と現代美術で構成した展覧会「When It Waxes and Wanes」Vereinigung bildender Künstlerinnen Österreichs（ウィーン）を企画、開催した。



『Multiple Spirits（マルスピ）』
左からvol. 1、vol. 2、vol. 3

「When It Wanes and Waxes」（2019年）
VBKÖでの展示風景
撮影：Claudia Sandoval Romero

「ジェンダーワークショップ」（2020年）
名古屋芸術大学での風景
撮影：田村友一郎

開発の再開発

現代は、気候変動、感染症、戦争、自然災害、テクノロジーなどによって、永続すると信じられていた日常が大きく変動し、将来の予測が困難な激動の時代となりました。この時代の現象には、ネガティブなものばかりではなく、不平等、差別、暴力を強いてきた社会や構造に抗議し変化を与えていく社会運動も含まれています。ソーシャリー・エンゲイジド・アートやアクティビスト・アートなどは、社会に直接的に関わり、そのような時代に対応したアートだといえます。しかしそのようなアートと社会の関わり方を見ると、そこにはさまざまな障害、温度差、矛盾、認識不足が存在しています。そのため私は、社会に直接関与しようとするアートのアプローチに限定せず、造形的表現や美術史においても、この時代を乗り越えるための新しい認識や方法へのアップデートが重要だと考えています。

「開発の再開発」というタイトルは、以上のような前提に向けられています。そして、開発であれ、再開発であれ、そこではなにかしらの「新しさ」が関わることを意味しています。

しかし、哲学者・美術批評家であるボリス・グロイスが指摘するように、この数十年間アートで「新しいことをするのは不可能である」という言説や認識が広く影響力をもってきました。「アートの終焉」（アーサー・C・ダントー）の言説は、この影響の歴史的な起点になっています。ここでの「終焉」とは、アートという営為自体の終焉を示しているのではなく、「アートの終焉」以後のアートが存続していくことを前提にしています。つまりアートは終わったままこれからもずっと続いていく。そのため「新しいことをするのは不可能である」という悲観的表明は、美術史の重荷や緊張関係から解放されて、アーティストが個々人の表現活動を自由に展開できればいいという楽天的な気分を含んでいます。

では、この激動の時代において、アートは、「新しさの終わり」や「アートの終焉」に留まり続けていていいのでしょうか。冷戦体制崩壊後の時代を象徴する「歴史の終わり」（フランシス・フクヤマ）という歴史認識に、批判的な検討の必要性があるとされているように、「新しさの終わり」という認識から批判的に脱却する必要があるのではないでしょうか。

ただし、これまでのトレンドと差異をつくり出すような新手のトレンドを提示したいわけではありません。なぜならそれは結局トレンドの構造を何も変えることがないからです。むしろ私たちは、これまであまりにも一方向的（過去→現在）な「新しさ」を信じ、限定的な価値基準で「新しさ」を認めてきたのではないでしょうか（アートの新しさとは、作品の様式や美術館の内部だけにあるものなのか）。

「開発の再開発」とは、「新しさ」をつくり出す開発という概念自体を、批判的に再開発する試みです。また、開発は結果ではなく過程であり、実験、研究、調査という行為が不可欠です。再開発は、開発がもつ拡大・拡張の一方向的なベクトルとは異なる時間的・空間的な展開を意味します。本展覧会シリーズの8組のアーティストやコレクティブには、テーマや表現形式に共通性がないとしても、それぞれが歴史や方法に関わる研究・実験的活動やコンセプトをもっています。それを駆動しているのは必ずしも作品や展覧会に成果が集約されないモチベーションかもしれません。展覧会や作品は、結果としてわかりやすく「新しさ」を示さないかもしれません。しかし、この投げかけによって「開発の再開発」とは何かを考える契機が鑑賞者にも生まれるのではないかと考えています。

石川卓磨（美術家・美術批評）

●石川卓磨（いしかわ・たくま）
1979年千葉県生まれ。美術家・美術批評家。芸術・文化の批評、教育、製作などを行う研究組織「蜘蛛と箒」を主宰。近年の主な論考に「パーティーの後で」『中﨑透 フィクション・トラベラー』図録（水戸芸術館現代美術センター、2022）、「寄生し、介入する 旅するリサーチ・ラボラトリー評」『丸亀での現在』図録（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、2022）、「アフリカ系アメリカ人として生きる「怯え」と文化的混血性。ラシード・ジョンソン「Plateaus」レビュー」（Tokyo Art Beat、2022）、「特権的な眠り――福永大介「はたらきびと」展」『月刊アートコレクターズ2021年1月号』（生活の友社、2021）など。

■取材、掲載用写真の貸出など、ご質問がございましたら下記までお問い合わせください。■
gallery αM ギャラリーアルファエム
e-mail: alpham@musabi.ac.jp ／ tel：03-5829-9109 ／ fax：03-5829-9166

武蔵野美術大学 大学企画グループ 連携共創チーム（ギャラリー不在時）
tel：042-342-7945 ／ fax：042-342-6087